短冊石と管田庵

庭園文化研究分科会　宇野 真一

1.　はじめに

出雲流庭園について長年疑問に思っていることが二つある。ひとつは「そもそも庭のテーマ・コンセプトは何なのか？」、もうひとつが「短冊石を巨大化させるアイデアはどこからきたのか？」である。後者の疑問について私見を述べたい。

2.　庭づくりのテーマ

日本庭園の石組・滝組あるいは池泉は、何らかの理想世界に擬せられている。神仙思想・蓬莱思想・浄土世界などを象徴したり、深山幽谷・名所（縮景）などの自然景観を模したり、鶴亀石・陰陽石といった縁起が良いものを配すのが日本庭園の一般的な姿であり、観光用の解説もその線に沿って行われることが多い。

ところが出雲流庭園は石組・滝組の存在感が希薄で、むしろ庭として印象深いのは短冊石・駕籠石だったりする。蹲踞・鉢前・袖垣が配されていることもあり全体としては露地庭のようにすら感じる。茶室の有無に関わらず露地風の庭だ。

庭づくり本来の（伝統的な）テーマである理想世界の表現が後退し、園路のデザインヴァリエーションに過ぎない短冊石・駕籠石が主景のようになっている理由について、いまだ納得できる解答が得られていない。

3.　短冊石について

長方形の切石を短冊石と呼ぶように誤解されているが、正しくは二つの長方形がすこしずれて重なった形状のこと指す。長方形であれば自然石や延段（小さな石で舗面を構成する）でも短冊石・短冊形と呼ぶ。

飛石の打ち方としては“いかだ打ち”と呼ばれ、園路に変化をつけるため長辺 1m前後の石を組み合わせることが多い。短冊石全体でも長さが 2mを超えることは少ない。

ところが出雲流庭園の中には、恐ろしく巨大な短冊石（切石）が存在する。代表的なものとしては、勝部氏庭園（3.7m＋2.7m、全体で 5m以上）、出雲文化伝承館庭園（4.4m＋4.3m、全体で 6m以上）、原鹿豪農屋敷庭園

（4.6m＋4.6m、全体で 7m以上）があり、特に出雲文化伝承館庭園と原鹿豪農屋敷庭園の短冊石は座敷正面に打たれ、庭のイメージを決定づけている。

出雲流庭園という名称は、小口基実氏と戸田芳樹氏が“玄丹流庭園”という言葉に惹かれて調査に訪れた際、地元では“玄丹流庭園”という言葉がほとんど知られておらず、しかし、明らかに地方色豊かで定型化された庭園群が存在したため、これを指し示すべく創られた言葉である。

両氏はその著書の中で、出雲流庭園は露地庭の影響が顕著であるため管田庵がデザインルーツではないかと指摘している。また短冊石の巨大さと特異性についても記述しているが、巨大化した理由までは触れていない。

私個人は出雲流庭園を三つのグループに分けて捉えている。ひとつが出雲文化伝承館や原鹿旧豪農屋敷に代表される短冊石・鴛籠石が印象的な広大な庭、ついで斐川地方の一般農家に今も見られる定型化された庭、そしてこれらの庭に先行して造られいくつかの共通要素をもっている庭である。時系列で並び替えると“プレ出雲流”、“出雲流・典型”、“出雲流・一般”となる。

“プレ出雲流”の庭を手掛かりにして巨大な短冊石が登場するまでの流れを考えてみた。

図 0-1　短冊石・自然石

図 0-2　短冊石・切石

図 0-3　短冊石

4. 管田庵～“プレ出雲流”～“出雲流・典型”

作庭年代を特定することは難しい。理由は二つあって、そもそも特別な庭以外は記録に残らないこと、もうひとつは補修・改修がよく行われるため現状とオリジナルの比較・特定ができないことである。管田庵でさえ作庭時期には寛政 2 年と寛政 4 年説があり媒体によって表記は異なるが、1790 年前後であることは間違いないようだ。

出雲流庭園は江戸末期から明治にかけて成立したといわれ、管田庵から遅れることおよそ 100 年である。その間に創られたと思われる庭を下表②～⑥に挙げている。その多くは前述した“プレ出雲流”で不昧や沢玄丹のエピソードが残された庭も含まれている。

⑦～⑩は“出雲流・典型”で、⑦勝部氏庭園は作庭年代がはっきりしないが、⑧・⑨が明治後期、⑩はおそらく大正期であろうと考えている。

表 1　庭園リスト（管田庵から出雲流まで）

庭園名	エリア	作庭年代	備考
1.管田庵庭園	松江	寛政 2or4 年 1790or92 年	**短冊型の延段**（向月亭）
2.一畑薬師書院庭園	平田	文化年間 1804～1818 年	短冊型の沓脱石（2.5m＋2.5m） S 字形の**延段**（L6.1m*0.6m）
3.康國寺庭園	平田	天保年間 1830～1838 年	沢玄丹の作庭と言われる **短冊型の延段**
4.櫻井家庭園	奥出雲	1803～04 年か？ （不昧来訪時）	岩浪（不昧命名）、主屋は 1738 年 霰くずしの**延段**（9m*1.0m）
5.八雲本陣庭園	宍道	1831～51 年か？ （明治 5 年以前）	茶室が明治 5 年頃、主屋は 1733 年 縦 2 列の**延段**（4.7m*0.6m）
6.山本家庭園	出雲	1882 年？	主屋は 1882 年、御成門は 1747 年 **短冊型の延段**（7.0m＋5.9m）
7.勝部家庭園	斐川	不明 （不昧が訪れた）	沢玄丹の作庭と言われる 短冊石（**切石** 3.7m＋2.7m）
8.江角家庭園 （出雲文化伝承館）	斐川	1896 年（主屋）	出雲流・典型、S 字形の敷石 短冊石（**切石** 4.4m＋4.31m）
9.江角家庭園 （原鹿豪農屋敷）	斐川	1898 年（主屋）	出雲流・典型、池淵松次郎(庭師) 短冊石（**切石** 4.6m＋4.6m）
10.絲原家庭園	奥出雲	寛政～大正末期 （段階的に作庭）	書院前（出雲流）は大正末期？ 短冊石（**切石** 1.82m＋1.83m）

5. 管田庵と“プレ出雲流”の延段

① 管田庵庭園

向月亭前庭には**短冊形の延段が**ある。延段を短冊形にすること自体珍しいのだが、両脇に青竹を配した独創性とセンスが際立ちデザイン評価も高い。私は巨大短冊石のデザインルーツと考えている。

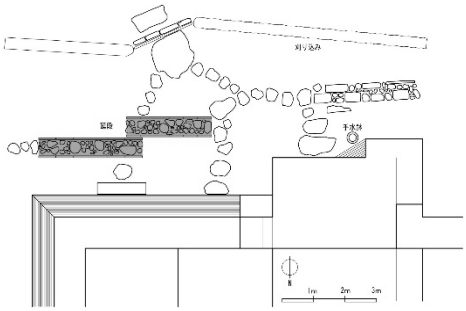

図 1-1　管田庵向月亭前庭

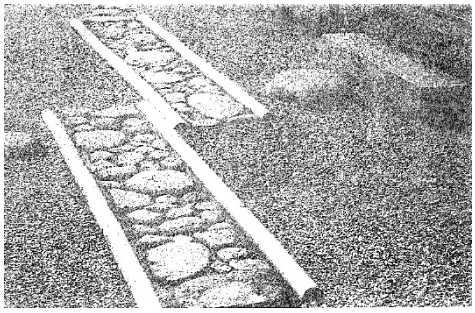

図 1-2　向月亭　延段

② 一畑薬師書院庭園

庭は全体に京都風の印象が強く、厳密には“プレ出雲流”でもない。園路の途中に優れたデザインの**S 字形の延段**があるが、出雲流独特の手法ではない。同様の延段は出雲文化伝承館でもみられる。

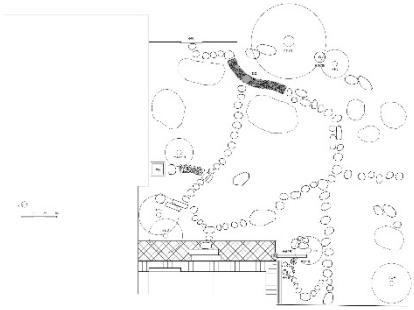

図 2-1　一畑薬師書院庭園（部分）

図 2-2　S 字の延段（園路の一部）

③ 康國寺庭園

中門をくぐった先に（書院正面ではない）**短冊形の延段**が打たれている。寺では玄丹流と称しており不昧との関りも気になる庭である。

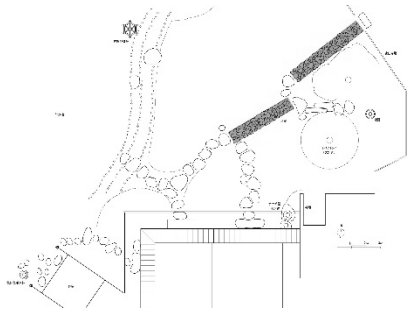

図 3-1　康國寺庭園（部分）

図 3-2　短冊石の延段（園路の一部）

④ 櫻井家庭園

中門をくぐった先に全長 9mの巨大な**延段が座敷と平行**に打たれている。不昧とのエピソード（岩浪の滝）もあり、この部分は不昧来訪時に造られた可能性もある。

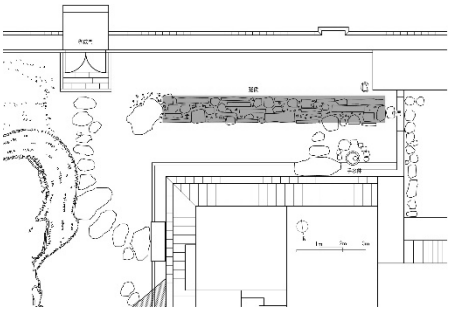

図 4-1　櫻井家庭園（部分・書院前）

図 4-2　延段（座敷に平行）

⑤ 八雲本陣奥書院前庭

書院前に**縦 2 列の延段**。作庭時期は不明だが明治 5 年頃（伝利休茶室・現在は松江歴史館）や、明治 40 年（飛雲閣、皇太子行幸）に整備された北側部分とは趣が異なるため、江戸末期の可能性もある。

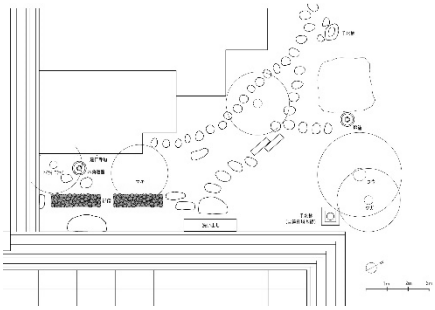

図 5-1　八雲本陣庭園（部分・書院前）

図 5-2　延段（座敷に平行）

⑥ 山本家庭園

座敷と**平行に短冊型の延段**が打たれている。作庭時期は不明だが遅くとも主屋と同じ明治 15 年頃と考えられる。座敷との位置関係やスケール感は巨大短冊石に極めて近い。

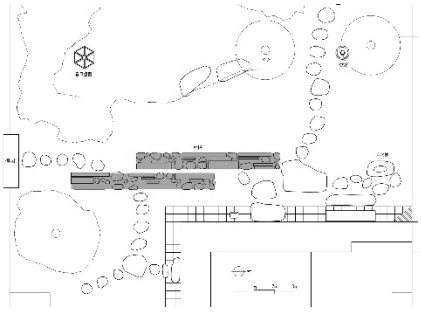

図 6-1　山本家庭園（主屋庭）

図 6-2　短冊石の延段

“プレ出雲流”の延段に着目すると、①管田庵・向月亭に影響され、短冊形に打つ手法（③康國寺）や座敷と平行に打つ手法（④櫻井家庭園・⑤八雲本陣庭園）が広まり、その両方を取り入れた⑥山本家庭園への流れが想定できる。“プレ出雲流”にも短冊石（切石・自然石）はあるが、そのサイズは一般的で巨大サイズではない。

この後、一般サイズの短冊石が巨大化していったと考えるよりも、“プレ出雲流”の延段が切石に置き換わったと考えたほうが自然な流れではないだろうか。

6. 巨大な短冊石（切石）の登場

切石への置き換えはどの庭から始まったのか？その可能性が高いと睨んでいるのは⑦勝部家庭園である。勝部家庭園の短冊石（切石）はあくまで園路の一部として打たれ、広大な庭の中に３カ所も配されている。巨大な短冊石（切石）の代表格は⑧江角家庭園（出雲文化伝承館）と⑨江角家庭園（原鹿豪農屋敷）であり、⑥山本家庭園の延段がそのまま切石に置き換わった形状なのだが、仮に⑧・⑨のデザインが先行していた場合、その後に⑦のデザインが生まれるだろうか？むしろ、園路の一部として広まっていた**短冊形の延段**を切石に置き換えた⑦のデザインが先行し、⑦と⑥の両方を参考にして⑧・⑨が生まれたと考えたほうが自然に思えるのだ。

なお、⑩絲原家庭園は短冊石、駕籠石、臼石などを用いたデザイン手法がほぼ完成したのちに庭の一部に導入したものと思われる。

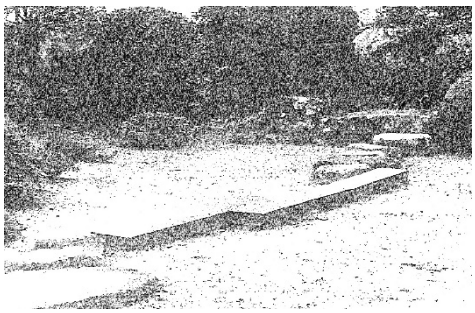

図-7　勝部家庭園　短冊石

図-8　出雲文化伝承館　短冊石

［参考文献］

出雲流庭園「歴史と造形」　小口基実・戸田芳樹著　昭和 49 年

図 1-2・図-7 の写真も同著より